

日本動物福祉協会一等賞

そばにいるよ、ケンジ

お茶の水女子大学附属中学校 二年

安藤 豪太 あんどう ごうた

僕には、今年で 16 歳になった兄がいる。兄の名前はケンジと言って、漢字は犬二と書く。犬二は、体重 3 キロのチワワだ。僕が生まれる 3 年前からうちの家族になったので、両親からずっと、犬二は僕のお兄さんだと聞かされていた。

ケンジは実際のところ、これまでずっと僕の兄だった。実際、明らかに僕を下に見てる。

父が帰宅した時は尻尾を振って玄関まで出迎える。母に抱かれるとうっとりとした顔で目を閉じる。でも僕が学校から帰っても、ケンジは目線を上げることにすらしめない。それでも、兄らしいことに、僕が小さい頃は毎晩僕を寝かしつけてくれたと母が言う。小さな僕のふとんの枕もとにうずくまり僕が寝入ると、「やれやれ、やっとな寝たね」という表情で母と一緒に僕の部屋を出たのだそうだ。

ケンジは今年になって、すっかり身体が弱くなってしまった。部屋で一日中寝ていることが多くなった。日課にしている毎朝の父との散歩もおっくうそうで歩く距離も随分と、少なくなったと父が言う。また、頭もぼんやりしてきたようで、トイレの場所をしばしば間違えるようになった。家のリビングにはケンジが粗相をした時用の掃除道具がどんどん増えてきた。でもケンジがトイレを失敗しても、家族は誰もケンジを叱ったりはしない。僕にはいろいろと厳しい父も、何かと口やかましい母も、「いいんだよ、ケンジ」といいながら掃除をする。僕自身もかなり後処理の手際が良くなってきた。家族のみんなが、これまでケンジからもらったものの大きさを分かっているのだ。

僕がケンジからもらったもの。

テスト勉強のため机に向かっている時、また、両親に叱られて一人で立ち尽くしている時。どこにも逃げ場がなくて追いつめられた気持ちになっていると、何かくすぐったい感覚が足元にわいてくる。見るとケンジが生温かい舌で一心に僕の足をなめているのだ。くすぐったくて、じんわりと心が温かくなっていくのを感じる。僕の気持ちが辛い時にはいつもこうだ。ケンジは何も言わないけれど、それが彼の僕に対する愛情なのだとはっきり分かる。

また疲れたなと思ってソファで寝ている時などに、お腹から温かさが広がってくる時がある。いつの間にかケンジが僕のお腹の上に乗って目をつぶっている。僕はゆっくりと気持ちと身体がいやされる思いがする。ただじっとそばにいてくれる、それだけで疲れや辛さが取れてくる。

僕はこの頃、学校やその他のところで、時々友達とうまくいかないことがある。友達の気持ちの状態がよくなって、一人にしてくれとか、話しかけないでほしいと意思表示をしてることがある。それでも僕は、その人のそばにいようと思うのだ。何も言わなくても、誰かがそばにいたことが人の気持ちをいやす。そういうことがあると知っているのはケンジがずっと僕に教えてくれてきたからだ。泣いている友達がいたら背中に手をあてる。黙って悲しんでいる友達がいたらしばらく一緒に歩く。ケンジが僕にしてくれてきたのは、人間でいえばそういうことだからだ。

今朝もケンジはトイレを失敗して、両親が朝からお湯や洗剤を持ってバタバタと忙しそうにしていた。最近ではケンジがトイレをきちんとできただけで家族のみんなが喜ぶ。僕はこれまで、いつもケンジに寄り添われて支えられてきた。ケンジのこれからの時間、僕がケンジに寄り添って支えていきたいと思う。